

ほなひ歴史通信

第22号
2002.3.1

一地区一景観整備事業への挑戦

——一本の桜の木が発信するメッセージ——

たった一本の桜の木でも、それを守り育てていくのは大変である。しかしその桜が開花したとき、お花見に来てくれる客にあたえるイメージには強いものがある。お花見と言えば、あえて「桜」と言わなくても日本全国共通で桜のことを指す。

毎年このことながら春の彼岸が過ぎると、今年の桜の蕾の付き具合はどうか、開花は何時頃になるかと気をもみながら心待ちにする。それがやがてポツポツと咲き始め、アツと言う間に満開になり、日本列島を南から北へと桜前線が駆け上がる。俗にいう桜花爛漫の候である。しかしそれも五月の連休が終わる頃には、薫風に花びらを舞わせて桜の季節は終わる。

一年三百六十五日のうち花を愛するのは十五日間、あとの三百四十日は維持・管理などの裏方に労力を費やさなければならぬ。古来から、「春宵一刻桜」と惜しまれ、「春宵一刻値千金、花有清香月有陰」等と称されるのはそのためであろう。

大子町指定天然記念物・外大野の枝垂桜は昭和五十年に指定されたが、以来二十年余何らの保護・整備策が取られずそのままであった。ところが平成十年に地元の人達によって「外大野枝垂桜を守る会」が結成され活動が始まると、まさに草の根をはるような地域ボランティア精神を発揮したのである。桜の木の根元への施肥から周辺の木障払いまで、人海戦術による環境整備作業である。また開花期間中の休日ともなれば話題を追って数多の観桜客が押しかけるため、交通整理や駐車場案内から湯茶の接待まで損得抜き地域活動が繰り広げられる。

今、ふと振りかえり、もしこの一本の桜の木がなかったら外大野集落のゴールデンウィークはどのようなものであったろうかと思うと、その答は推して知るべしである。外大野集落にとって枝垂桜は、その地域に住む人達が一心に作りあげたシンボルタワーと言えよう。

筆者は、前々から一地区一景観整備事業というものを提唱している。どこの地区にもどの集落にも一カ所ぐらいは環境を整えれば人さまに自慢できる場所があるのでないだろうか。巨樹や野生の草花の群落、あるいは奇岩・怪石の類、また渓谷や瀧、山岳や峠などジャンルは問わない。思いつくままあらゆるものを事業の対象にして調査・検討をしてみることである。そのなかから一カ所を選定し、そこを拠点に景観整備活動が続けることによって、改めて自分たちの住む地域を見直せば、自分らにもやれば出来るという自信と、地域に根ざして生活しているんだという誇りを持てるようになるのではないだろうか。

このような視点に立って外大野の枝垂桜を守る会の活動を見るとまさに我が意を得たりの心境である。

(吉成)

こうぞ ぶか
楮蒸し余話

大森政夫

私は、「ほない歴史通信」第二十号のなかで「楮蒸し」のことを書いた。

ところが、先輩の益子慈鳥さんから、「その後の『釜じまい』のことが書いてなかったね」と電話をいただいた。

私は、「釜じまい」のことは知る由もなかった。当時は遊び半分の手伝っていたし、それは農家自らの行事でもあったからである。

私も「釜じまい」のことが知りたいたので、教えていただいた先輩に感謝しながら、頃藤地区で代々農業を営んでいる菊池一雄さん宅を尋ねた。菊池さんは快く迎えてくれ、炬燵を囲んで奥さんともども楮蒸しにまつわる「釜じまい」のことやその背景について話してくれた。

そもそも農家では、年間を通じて農作業が合理的に組み込まれていて、作業始めには暦を見て行う習慣があった。例えば、種子を蒔く日とか収穫をする日とかがそうである。

楮蒸しもその例外ではなく、まして火を使うこととなればなおさらのことである。暦を見て、佳い日に作業始めを厳粛にやっていた。

当地の農家では、年間を通じて集中的に人手が必要な農作業は、家族の手だけでは賄いきれないため「ユイ」によった。「ユイ」とは、何軒かの農家が集まって、相互理解のもとに協同作業を行うことである。

この「ユイ」による主な農作業は、田植え、お茶摘み、秋の収穫や脱穀、蒟蒻の荒粉づくり、そして楮蒸しなどであった。

この「ユイ」は、農作業が時期的に遅れないようにするため、区切りをつけて「ユイ」仲間の作業を公平に片付けていくのである。例えば、今日はAさん宅、終われば続いてBさん宅と、順次同じ作業を連日続けて終わらせるのである。

楮蒸しも、もちろん「ユイ」によることがほとんどで、菊池さん宅の「ユイ」グループは、隣り近所の五軒で組織されていた。この「ユイ」を利用して、最初の根切作業から最後の表皮とり作業まで一貫して行われることもあった。なかでも楮蒸し作業は、集中的に多くの人手が必要であったので、「ユイ」仲間以外からも応援が駆けつけた。

菊池さん宅の庭先には、毎年使う窯があった。楮蒸しが近づくと窯を補強したり、清掃したりして、火入れに佳い日を選ぶ。

当日は午前一時頃起床し、「初釜」として窯を浄め、火を入れる。楮を蒸すための薪は、晩秋から初冬にかけて農閑期を利用して山から切り出す。当地では、このことを「山へキイコリに行く」といった。

麦蒔きがすんで一段落すると、山へ入って木の葉さらいだ。これが終わると、キイコリをやる。冬は、農繁期にできなかった仕事をやる。縄もじりなどもあるから、一年中仕事があるわけだ。

と、菊池さんは語った。そう言えば、当時、薪は炊事、風呂、囲炉裏で毎日燃やしたほか楮蒸しにも大量に使っていた。当然のことながら、この時期に一年燃やす量の薪を確保して、木小屋に積み重ねておかなければならなかった。

最初に蒸す釜を「初釜」といった。初釜で蒸し上がる時間は、二、三回目より長くかかった。約二時間から二時間半くらいである。燃す薪の量も、直径十センチ、長さ六十センチのもの約



二十本と多くを必要とした。

窯の火は、楮蒸しが全部終わるまで幾日でも絶やすことはなく、昼夜を問わず交代で火番をする。作業の進み具合によっては、夜間に楮蒸しを行うこともあるからである。

また、楮蒸しの傍らでは楮の切断、結束作業を行う。ただし、その日に蒸せるだけの量である。これは、木口が乾燥してしまわないうちに蒸すことにより、楮の皮がむきやすくなるからだ

という。

楮を蒸した後には、熱い内に皮を剥ぐ作業がまっている。昼間は庭先で、夜間は暖をとりながら、土間に箆を敷いて総出で楮むきをするのである。この時ばかりは、猫の手も借りたいほどの忙しさである。

こうして木質部を取り除いた「表皮」は、土間や軒下にさらしておく。この時「表皮」を重ねたり、密着させておくと青カビが生え、楮の品質をそこねるので、空気の流通がよいように一時保管をする。

「ユイ」で手伝ってもらう家では、やきもち、煮しめ、蒸しさつま芋などを、お茶休みである「こちはん」に出してもてなしをする。

懇意にしている非農家の人たちや子供たちまで手伝ってくれて、ひとときわ大勢で作業がはかどる。

こうして、五軒の家々で楮蒸しや楮むきが三日三晩くらいかけて終わると、一段落した区切りとして、釜を片付けることから「釜じまい」が行われる。

「釜じまい」は、窯口周辺に箆を敷いて「ユイ」仲間が窯口を淨めることから始まる。楮蒸しがつつがなく終わったことを感謝しながら、「あずき粥」を中心に酒や煮しめなど手づくり料理が筵に並べられ、飲食が始まる。そうして、窯口の火が徐々に消えるのを待つ。やがて大釜やコシキ（大桶）などが片付けられ、最後に清掃して窯口が閉ざされる。

この楮蒸しが終わると、次の作業である「表皮とり」が待っている。水が張り詰めた桶から表皮を取り出し、湯で暖めながら、昼となく夜となく表皮を取るのである。

それは、男体山や長福山に雪がちらつき、新しい年をもうすぐ迎えようとする頃のことである。

西福寺跡

西福寺（馬頭町大山田の總徳寺の末寺）は大子町左貫にあつた。大子地方で茶が栽培されるようになったのは、この西福寺が始めてであると言われている。



室町時代の大永年間（一五二八〜）西福寺の僧が京都より持ち帰り、植えたのが始まりと言われているが、慶長年間（一五九六〜）に左貫の石附兵次が宇治から持ち帰って西福寺に植えたという説もある。我が国にお茶が入ってきたのは、それよりおよそ七〇〇年前の桓武天皇の延暦二十四（八〇五）年、僧最澄が中国より持ち帰ったという説や、空海も持ち帰ったなどの説がある。

中国では古く、紀元前から薬用として珍重され、かなり高価であつたと思われる。

このように寺院を中心に茶の栽培が広がって来た。やがて禅宗とともに茶道がさかんになり、鎌倉時代から江戸時代にかけて、広く武士の間に広がり、庶民の間にも広がってきた。同時に茶の栽培も各地でさかんになってきたものと思われる。しかし製法は粗製濫造にして、単に日光で乾燥した程度の物で、現在の茶とは雲泥の差があつた。

水戸藩では、光圀が茶の栽培に力を入れている。光圀は元禄五（一六九二）年那珂町の常福寺に茶を植えたり、常

北町の清音寺の茶に「初音」と命名したりしている。清音寺には、この銘木が今でも立派に保存され、古内茶の起りとされている。また、斉昭も茶の先進地宇治から小川佐助を呼び茶の改良に努めたり、天保十四（一八四三）年には「国中大通りの左右には楮・桑・茶を植えよ。」とか、翌弘化元年には「畠へは境目より三尺引つ込め楮・桑・茶を植えよ。」などと指導している。

こうして、大子地方にも茶の栽培が広まった。江戸時代末期の嘉永年間、初原の藤田文次郎は茶の製法の改良と普及に努め、斉昭公より褒状と革製の鞆・短刀を頂いている。明治になつてからも、多くの人が茶の栽培・製法に工夫を凝らし、次第に奥久慈茶の名声が高まつてきた。

こうしてみると、西福寺は大子地方の茶の栽培に先駆的役割を果たしたのだが、残念ながら、この寺は今は無い。江戸時代の天保十四年に廃寺になつたのである。

今は、ただ古池と、ツバキなど数本の立木、礎石らしい石が数個草むらに散在するだけである。ただ屋敷跡が立派な茶畑になつているのが、せめてもの救いである。（石井）

編集人 斎藤典生（茨城大学人文学部）

野内正美（茨城県立歴史館）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圀彦（大子町教育長）

吉成 英文（大子町社会教育課）

井上 和司（大子町税務課）

編集発行

遊史の△△

大子町立中央公民館歴史資料室寄付

久慈郡大子町大字池田一六六九番地

三九三三

〇五七二二六七